地域に残された寺院跡の手がかりを探る

常陸大宮市文書館では、当市の歴史を語る上で重要な公文書や古文書を収集し、保存・公開する業務を行っていますが、同時に、これらの文書に残された情報をもとに、地域の記憶を拾い上げる作業も実施しています。江戸時代の古文書を読み進めると、現在は失われてしまった寺院の存在が明らかとなり、そのうち数か所については、過去に本紙で連載していた「文書館だより」の中で紹介しました。今回は、これまでと少し視点を変えて、地域に残る様々な情報を手がかりに、地域の寺院跡を調べる方法についてお話します。

①地名から寺院跡の手がかりを探す

各地区に古くから伝わる地名（小字）は、地域の歴史をひも解くための重要な手がかりです。特に、「寺屋敷」や「堂庵」、「堂山」など、寺や堂の漢字が含まれる地名は寺院跡であった可能性が高く、付近にはかつての墓域が残されている場合もあります。例えば、小田野地区字堂下に所在する三浦神社の境内には、かつて藤福寺と呼ばれる寺院が所在していたほか、諸沢地区字堂平には、金砂大権現（西金砂神社）の一部である千手観音堂が存在し、源頼朝と佐竹氏の戦い（金砂合戦）で焼失したことが「金砂神社縁起」（鷹巣家文書）に伝わっています。これら地名に関する情報の一部については、図書館情報や文書館で閲覧することができます。

②現地の伝承や石碑などの痕跡を探す

①のような地名が確認できない場合でも、現地の伝承などから寺院の痕跡を知ることが可能です。例えば、大宮北町付近には「寺町」と呼ばれる伝承地名が残されていますが、これは大宮小学校一帯に寺院が広がっていた可能性を示唆するものであり、実際

▲諸沢堂平地区（伝千手観音堂跡）

▲旧西方寺入口に立てられた石塔群（大岩地区）

に水戸藩が寛文3年（1663）に作成した「開基帳」によると、部垂村（現在の大宮中心部）に20を超える寺院が存在したことが記されています。また、各地に残る小さなお堂や石碑にも寺院跡の存在を示唆するものがあり、野田地区には旧長源寺の跡地に建てられたお堂が所在するほか、大岩地区には旧西方寺の入口に建立したとされる石塔群がそのまま現存するなど、かつての名残を確認できます。

③古文書から探す

①、②の他にも、古文書に寺院名が直接登場する事例が存在します。最近新たに発見された史料では、寛保元年（1741）に作成された「向福寺開基掛合御寺社御郡両奉行所御裁許書留帳」があります。これは宇留野地区に所在した向福寺に関する文書で、数名の村人が先祖の由緒や法名を無断で偽ったのではないかと檀家中から訴えられた騒動の顛末や願書の控えが綴られています。向福寺に関する古文書はこの1点しか確認されておらず、地域の歴史を現在に伝える貴重な記録です。地域には貴重な古文書がまだまだ眠っている可能性がありますので、今後も新たな常陸大宮の歴史が明らかになるかもしれません。

▶「向福寺開基掛合御寺社御郡両奉行所御裁許書留帳」（小泉忠氏寄託）

【参考文献】
・鷹巣照定『西金砂神社記録－翻刻と解説－』令和４年

（文書館　高橋拓也）